

大学生のファッションに関する人類学的研究 —留学生の視点から

文化人類学履修モデル シンジルトゼミ

205L1049 宮元昭桂理

第1章 序論

本論文は、外国人留学生の視点を通じて大学生の服装やファッションを考察し、日本人自身が普段意識していない文化的特徴や価値観を明らかにすることを目的としている。大学生に焦点を当てる理由としては、年齢層の違いによる服装や価値観の多様性を回避するためである。筆者自身の留学経験や留学生との交流を通じて、日本のファッション文化に対する多様な視点を得たことが動機となった。本研究では、熊本大学の9名の留学生（国籍：中国、韓国、インドネシア、ベトナム、アメリカ、スーダン、イラン、フランス、ドイツ）を対象にインタビュー調査を実施した。質問内容としては、日本人学生のファッションと母国の学生のファッションの違い、ファッションと日本文化や日本人の性格との関連性などを含んだ。

第2章 日本のファッションの概要

本章では、日本のファッション文化の形成と特徴について、歴史的背景を中心に議論する。まず2.1節では、ファッションの定義と衣服の役割について考察する。衣服は単なる身体の保護手段にとどまらず、社会的地位や個人のアイデンティティを表現する重要な役割を担ってきた。特にファッションは、文化や社会の変化を反映する動的な現象として捉えられる。

続いて2.2節では、日本人のファッションの変遷について述べる。戦後の西洋文化の流入による洋装の普及とともに、ファッションは個人の表現手段としての役割を強めた。しかし、この過程では日本の伝統的な衣服や文化に対する「古い」「時代遅れ」といったネガティブな認識やコンプレックスが一部で見られた。

2.3節では、ジャポニズムの広がりについて取り上げる。19世紀末から20世紀初頭にかけて、日本の着物や文様が西洋文化に与えた影響は非常に大きかった。ジャポニズムは単なる美術や工芸の分野にとどまらず、ヨーロッパのファッションにも取り入れられ、日本文化の国際的な価値を高めた。

最後に2.4節では、現代における和装の再評価について考察する。ジャポニズム運動を通じて和装が西洋で称賛されたことは、日本人に自国文化への新たな自信を与えた。この評価を背景に、和装は単なる伝統の継承ではなく、文化的アイデンティティの象徴として再認識されている。さらに、グローバル化の中で和装は特別な場面で選ばれる象徴的な存在となり、伝統とモダンが融合する新しい価値を持つようになっていく。

第3章 これまでのファッション研究

第2章では日本人のファッションの歴史的変遷について述べてきた。それでは、異なる文化圏におけるファッションの象徴的意味や社会的役割はどのように理解されるべきだろうか。本章では、これまでのファッション研究を整理し、本研究の位置付けと意義を明確にする。

る。文化人類学者の宮脇千絵（2017）は、中国雲南省のモンの衣装を「審美性」「真正性」「規範性」という3つの観点から分析し、衣装がコミュニティのアイデンティティを象徴する重要な役割を果たしていることを示した。一方、文化人類学者の大石侑香（2017）は、北ハンティの毛皮衣服が防寒具を超えた審美性や神聖性を持つ文化的価値を有する点を明らかにしている。これらの研究は、衣服が社会的・文化的価値を反映する存在であることを強調している。

宮脇（2017）と大石（2017）の研究は、それぞれ異なる文化圏を対象としながらも、装いが持つ文化的・社会的意義を包括的に捉える視点を提示している。第4章のインタビュー調査では大学生のファッションが単なる流行ではなく、文化的価値や規範をどのように反映しているかを明らかにすることを目指す。

第4章 留学生から見る日本人学生のファッション

本章では、熊本大学に在籍する9名の留学生へのインタビュー調査をもとに、日本人学生のファッション文化の特徴について分析し考察する。調査対象者の国籍は多岐にわたり、それぞれの視点から日本人学生のファッションに対する印象や評価が語られた。

調査の結果、日本人学生のファッションには「控えめさ」や「調和」が際立ち、特に淡い色彩の選択や統一感のあるスタイルが特徴的であった。また、場面や相手に応じた柔軟なファッションの選択により、審美性と実用性が巧みに両立されている点も特徴的である。さらに、肌の露出を控える傾向やアクセサリーの多様な使い方から、大学生のファッションが個性だけでなく、調和や配慮を重視する文化的価値観を内包していることが明らかになった。

また、留学生らが日本のファッション文化に驚きや戸惑いを覚えながらも、次第にその要素を取り入れていく過程も見られた。この適応過程は、ファッションが異文化間の相互理解や交流において重要な役割を果たしていることを示している。

本章では、これらの調査結果を「審美性」「独自性」「文化的価値」の3つの観点から整理し、具体的な事例を挙げながら日本人学生のファッション文化の特性を考察した。この分析を通じて、日本のファッションが持つ多面的な魅力とその社会的意義が浮き彫りとなった。

第5章 結論

本研究の成果は、日本文化や日本社会における価値観を再評価する機会を提供し、日本人自身が気づきにくい文化的特性を浮き彫りにした点で意義がある。また、異文化理解を促進するための具体的な手がかりを提供し、留学生らが感じた驚きや違和感を通じて、日本文化を他者に伝える際の課題や可能性を考察する基盤となる。さらに、日本のファッション文化がグローバル化の中でどのように独自性を維持しながら変容しているかを理解する上での示唆を与える。

一方で、本研究にはいくつかの限界がある。調査対象が熊本大学の留学生に限定されているため、異なる地域や文化圏におけるファッション文化との比較は未解明のままである。また、特定の文化圏に偏らない多様な視点を取り入れることで、より普遍的な結論が得られる可能性がある。今後は、より広範な背景を持つ調査対象を設定し、日本のファッション文化と国際社会との相互作用を包括的に分析することが求められる。